

泰雅族の朗唱の研究

—泰雅族を例として口頭文化の変容を考察する—

伊藤 順子

日本大学大学院総合社会情報研究科

A Study of Oral Culture

—The Change in Appearance of Oral Culture of the Atayal Tribe—

ITO Junko

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This work focuses on people from ancient times who have expressed themselves through an oral culture. In its early stages of development an oral culture has no written language. As an example, the aborigines of Taiwan have no written language even now. They handed down poems, songs and stories orally. However, these days there is an increasing tendency for external factors to gradually bring about change in this long-established tradition. This paper presents research on the pattern of change in the Atayal tribe, with the understanding that this pattern can be applied to other oral cultures.

1.はじめに

人がまだ文字を獲得する以前、声の翼にのった言葉は確かな力を持っていた。それは時に楽しみ、また祈りとして、時に子孫に伝える知恵となって表れた。遠く遡れば、古代の呪術、ギリシアの吟遊詩人、古いユダヤ教のヘムなどにまでその源をたずねることが出来る口頭文化。人々は連綿と、言葉に心を、思いを込めて口から口へと伝えてきた。

このように口承が記録・伝達の全てであった時代から、文字で書き記すことが一般的なことから世界が変化していく中で、台湾の原住民族は文字を持たない社会を近代まで保っていた。中でも泰雅（タイヤル）族という民族には、長い間培われた吟唱や朗唱の伝統があり、2007年8月の調査から、これらが日常的に行われていたことがわかった。1人が歌いだすと、誰かれとなく歌が続いていった光景を目の当たりにするとき、筆者はこの民衆の生活に深く根付いた口頭文化に、強く心を打たれた。このように、この伝統的な慣習は、台湾の激動流転の歴史にも途絶えることなく現代まで伝えられ、近年の原住民文化の復興とともに民族意識宣揚の役割を果たすまでに展開している。

そこでこの小論では、泰雅族の口頭文化について調査・研究し、これをもって1つのモデルとし、外部要因との関わりも視野に入れ、口頭文化の変容を考察していきたい。

1.1 当該テーマに関連する先行研究について

台湾の日本統治が1895年に始まって以来、日本人研究者らによって初めて原住民研究の端緒がひらけた。ここでは草創期と近代に分けて総括するが、草創期の研究は比較的一次的資料としての色合いが濃い。

1.1.1 草創期

①森丑之助 1918『臺灣蕃族誌第一巻』

森が調査を開始したころ、台湾原住民文化にはまだ調査研究の手が入っておらず、原初の状態を保っていた。森の研究は一次的資料としての性格が強いが、漢族の移民が増え、日本による統治の圧力が強まるとともに、台湾原住民の文化と社会が大きな衝撃をうけるであろうとの森の予測に筆者は依拠する。

②移川子之蔵 1935『台湾高砂族系統所属の研究』

移川は発祥地、「人」という単語の差異などから

泰雅族を3つに分類した。現在では、そのうちの1つはすでに他民族として認証されている。筆者は泰雅族の分派の淵源をここに求めるが、さらに移動を続けた3つの系統の終着点における口頭文化を研究する。

③小川尚義・浅井恵倫 1935『原語による台湾高砂族傳説集』

泰雅族のものとしては、大豹社、タコナン社に伝わる伝説を採集している。大豹社の伝説の中に石成神話があり、泰雅族の創生神話の中軸をなしている。本研究では、系統による口承の差異や口碑から記録へと変容した伝承の形態を探る。

1.1.2 近代

①頼霊恩 2002『泰雅 Lmuhuw 歌謡之研究』

Lmuhuw とは朗誦式歌謡の意であり、本研究の主題の1つでもある。

②呉仁恵 2004『烏來地區泰雅族祖靈祭儀式流變之探討』

筆者の考える北部の地域の1つが烏来である。筆者はこの地の祖靈祭を参与観察できなかったもので、この研究に依拠する。

③鄭光博 2006『懷念、遙想泰雅故郷の根源』

鄭はここで、泰雅族の神話や移動を系統的に扱っている。本研究も同様に移動の系統という観点から進める。

1.2 フィールドワーク

かかる研究の性格上、人類学、民族学的な調査であるフィールドワークは欠かせない。そこで、この小論は2007年8月、2008年8月の2回のフィールドワークを元に行っている。

以下に調査地とインフォーマントを簡略に記す。

2007年8月 台北縣烏来郷烏来村

2008年8月 ①桃園縣大溪鎮義和里環湖路

話者：黄榮泉さん Masa Tohui

1932年10月17日生 76歳

日本名：原 正次郎

林昭明さん Watan Taga

1930年1月16日生 78歳

日本名：渡井貫行

②桃園縣復興郷澤仁村與

話者：林明福さん Watan Tanga

1931年7月1日生 77歳

日本名：戸山義雄

③苗栗縣泰安郷梅園村

話者：柯菊蘭さん Lawa Tawyu

1916年生（登記民国12年）

実際は90-94歳ぐらい

④苗栗縣泰安郷象鼻村

話者：高春輝さん Dali Wasaw

1928年3月1日生 80歳

日本名：山中竹男

なお、現地においては、中国文化大學國貿系の郭國興博士、國立政治大學民族系の王雅萍先生、順益台灣原住民博物館の研究員の侯道慧さん、泰雅族出身の歌手の雲力思さんはじめ、数多くの方々の協力を頂いた。皆さまに衷心より感謝申し上げます。

2. 泰雅族の口頭文化の種類

2.1 泰雅族について

台湾に現存する原住民の1つである泰雅族は、台湾北部から中部にかけての山地に広く分布している。北は台北縣、南は南投縣、東は花蓮縣、西は苗栗縣などに達し、分布面積は最も広い。人口は阿美（アミ）族について2番目に多い約8万7千人¹である。泰雅族はオーストロネシア語族に属し、その特徴として水平織り、アニミズム信仰、刺青などが見られる。

かつては首狩りをもって近隣諸族を押し、日治時代にも霧社事件などの果敢な抵抗を行ったが、太平洋戦争下では皇民化教育が浸透し、高砂義勇隊などとして勇猛に日本の軍属となって戦った。

泰雅族の最も重要な精神的支柱は祖霊である。彼らにとって人生の目標とは、祖先から伝わるgagaと呼ばれる規範に従うことだとしている。この祖霊の典範は生活、習慣、禁忌、社会組織、祭祀など広範に亘り、伝統的な泰雅族の社会の全て

の源ということができる。もし、祖先の行ってきた言動に従って生活するならば、祖先を喜ばせその加護を得ることができる。反面、祖霊の教えに従わないならば、祖霊のもとに下って罰を受けるだけではなく、死後も順調に霊界に入りにくい。伝統的な泰雅族の社会は厳格、純粹を以てその特徴をなす。これは誰もが祖霊の威光を恐れ、互いに逆らってはならないと戒めているからである。

2.2 泰雅族の口頭文化の種類

泰雅語は、現代も基本的には文字を有しない。第2次世界大戦後国民党が学校教育において、標準中国語を強制導入した結果、原住民族も現在では中国語を話し、漢字で文字表記を行う。その一方で泰雅語自体のアルファベット表記化も取り組まれている。泰雅語による生きた口頭表現という点、伝統的な場においてのみ辛うじて継承されているというのが現状である。口頭文化の形態には歌や語り、お触れや祭辞など様々なものがあるが、ここでは、歌謡を泰雅族の口頭文化の中心をなすものと考え、さらに歌謡が何を伝えたいかという点に着目して「古訓」「史歌」「即興歌」「相聞歌」「讚美歌」の5つの分類を考えた。²

2.2.1 古訓の特質

古訓とは「泰雅古訓」「祖先之留言」など種々に表記されるが、基本的には祖先から伝わる道徳的な規範を歌ったものである。親孝行の勧めや不倫関係の諫めなど、その内容は広範囲に亘る。前述の *gaga* を歌い込んだものと言いうこともできる。ここに、例として1つ挙げる。以下に歌の内容を記すが、泰雅族は文字を持たないので中国語に訳したものを引いた。

「泰雅古訓」
 發祥的地方有個平台
 那是泰雅的祖居
 為了繁衍我們的族群
 三個兄弟往北方發展
 到桃園、新竹
 到宜蘭

在南投、台中
 出發前
 互相堅定的承諾
 不要用木牆彼此隔離
 要像箭筈發芽一般、茂盛的繁衍
 要像藤條一樣、堅硬而有彈性
 我們是来自同一奶頭的子民
 要遷擇世代血緣
 四代以降才能遷婚
 不要亂倫、否則
 祖靈將懲罰我們
 要堅守我們的生活規律
 若有合適的對象
 長者拄著拐杖去提親
 感謝祖先留給我古訓
 我們要傳承、不要樹敵
 泰雅啊！泰雅
 要和平相處在這塊土地上³

「泰雅の古い教訓」
 祖先の興った地には平らな台地がある
 そこが祖先の居住した地だ
 我ら泰雅族が繁栄するため
 3人の兄弟が北方へ進出した
 桃園、新竹へ、
 宜蘭へ、
 南投、台中での
 出発の前
 互いに堅く誓い合った
 木の壁で互いを隔ててはいけな
 箭筈（たけのこの一種）の芽のようによく繁
 栄しなければならない
 藤のつるのように強くしなやかでなければな
 らない
 我らは同じ乳から生まれた民である
 代々の血統を選ばなくてはいけない
 4代目以降で結婚することができる
 倫理を乱してはならない
 規則を破ってはならない
 さもなくば祖霊が必ずや我らを罰するであろ
 う

我らの生活の規律を守らなければならない
 ふさわしい相手がいれば
 長老が杖を持って縁談の話を持ち込むだろう
 祖先が我らに古い教訓を残してくれたことに
 感謝する
 我らはこの古い教訓を伝えなければならない、
 また敵を作ってはいけない
 泰雅 ああ！ 泰雅
 この地で平和にお互い暮らしていかなければ
 ならない

(筆者訳)

冒頭にある発祥の記述についていささか述べておく。泰雅族発祥の地は、高い山ではなく住みやすい平らな台地のあるところであったのだろう。そこに「高さ二丈餘の岩が今に残つてゐるが、太古この岩が割れて、其の中から自分等の祖先が生れ出たのである。」⁴という説がある。発祥の神話・伝説はその民族固有の風土、文化、価値観、権力的背景など種々の要素によって少しずつ形成されていくと考えられる。泰雅族の創生神話には様々なヴァリエーションがあるが、共通しているのが、石の裂け目から生まれたり木の根の股から生まれたりという自然からの創生である。ここに泰雅族の自然に対する深い信頼や敬愛が窺われる。

2.2.2 史歌の意味

史歌とは泰雅族の民族の移動の歴史を歌ったものである。狩猟民族の宿命として獲物を求めて、あるいは人口の増加に伴って、彼らは一定期間ののちに移動、分派を繰り返してきた。彼らの歴史は移動の歴史そのものであると言えることができる。部族によっては、10～12代ぐらいまで遡って歌うことができる。

最初の祖先が何処々から出て、何処其処の山や川を経て、何時々誰それが頭目になり、また何々部族と戦い、勝ったり負けたりといったようなことが延々と歌われる。これらの固有名詞を覚えていくことが、頭目（その部落の最高責任者）の最重要の資格となる。何故なら、移動の途中で他部族と出会ったときに、お互いの頭目同士がそれぞ

れの由来を歌い、そこで同胞であることがわかれば戦いは避けることができるし、また縁談の話があったときに、彼らの出身部族の頭目同士が由来を歌い合うことによって、近親結婚を未然に防ぐという重要な役割を担っているからだ。これらは、頭目から副頭目へと代々口伝にて伝えられる。

2.2.3 即興歌

泰雅族の歌は、一定の決まったメロディー、例えば「C-B♭-C-C」「G-B♭-G-G」などの非常に短いフレーズを好きなだけ自由に繰り返したり、単語や意味によっては1音を長く伸ばしたり縮めたりして歌われることがある。歌詞は歌う者の心のままに、その場に合った内容で即興的に歌われる。今回のフィールドワークにおいて、筆者は何度も泰雅族の老人に、即興の歓迎の歌を歌って頂いた。即興の歌には生活上の経験や智慧、ユーモアやペーソスなどが盛り込まれ、人々の心が素直に表現されている。

2.2.4 相聞歌

泰雅族の人々は非常に情熱的である。若い男女が思いを告げるとき、全身から熱情が溢れ出るかの感がある。しかし泰雅族の社会においては、gagaという精神的な規範が全てである。男女の関係もその例に洩れない。従って、彼らの情熱は歌や口琴によって最大に昇華されていくのだ。

2.2.5 讃美歌

1950年代、長老会、天主会、真耶穌教会と様々な宗派の外籍の宣教師たちが、次々と泰雅族の村に入って行った。結果、大量の部落民の入信を見、現在では70%がキリスト教信者という村もあるほどである。信者たちは毎週土曜日に教会で讃美歌を歌うので、民族伝来の歌よりも親近感をおぼえているようだ。最近では、新しい泰雅族の讃美歌が生まれており、創作民歌に「讃美天父歌」というジャンルができたほどである。⁵以下に一例を挙げる。中国語訳を使用した。

「讚美歌唱」
 我們要讚耶和華用鼓聲彈琴讚美祂、
 唱歌跳舞讚美祂、唱歌跳舞讚美祂。
 歌頌讚美和華讚美耶和華、
 高聲讚美主的聖名、
 我們讚美祂、我們讚美祂、
 真到永遠讚美祂。⁶

「讚美之歌」
 私たちは太鼓や琴の音でエホバを讚美しよう、
 歌い踊り讚美しよう、歌い踊り讚美しよう。
 エホバを褒め称えエホバを讚美しよう、
 声高らかに主の御名を讚美しよう、
 私たちは讚美しよう、私たちは讚美しよう、
 常しえに讚美しよう。

(筆者訳)

以上伝えたいことの内容から、五種の歌謡の特質について考えた。中でも、古訓に見る祖霊信仰、また史歌で歌われる移動の歴史は、泰雅族の口頭文化の根幹をなす最も重要な柱といえるので、これらを別に項目を設けて考察する。

3.古訓にみる祖霊信仰

泰雅族には、もともと *utux* という名の霊的な存在への信仰があった。⁷それは祖先の霊魂であり、宇宙に遍満する超的なものである。小島由道、古野清人、鈴木實らによる先行研究⁸でも霊魂の不滅、*utux* による万物の創造などが共通して取り上げられており、泰雅族における祖霊の重要性を証明することができる。このように泰雅族の人々は、祖霊に対する感謝や畏怖の念、敬虔な思いを年一度の祖霊祭で表現する。従って、呉仁恵も「烏來地區泰雅族祖霊祭儀式流變之探討」⁹でいっているが、祖霊祭は泰雅族の祖霊信仰で、最重要の祭りといえることができる。そこで筆者はこの祖霊祭に着目し、口頭文化へどのように関連、寄与しているかを概観する。

そもそも祖霊祭とは如何なるものであろうか。台湾原住民研究の先駆者、森丑之助による『臺灣蕃族志第一卷』「祖霊祭」の項を参考にする。¹⁰

泰雅族には穀物の収穫が全て終了した際、新穀を祖先の霊に供えて祭祀するという風習がある。この祭祀の時を以て年の改まるものとし、新年に対するような祝いを行う。その方式は部族によって多少異なるが、大筋は次のようなものである。

頭目は祭日を決め、その前日に酒を造り、鹿肉や栗などを葉に包んで、紐で縛り木の枝に突き刺したものを、少年に持たせ、未明に付近の樹林に赴き、大声で祖先の名を呼ぶ。こうして祖霊の靈魂を招き、祭辞を述べて帰り、その後宴飲を楽しむ。

祭辞は次の通り。

祖霊たちよ、私はここに太古の慣例によって祭祀を行う。かかるがゆえに我らが狩猟するときは、多数の鹿を授け給え。我らが畑を耕作するときは良い栗やモミを豊穰ならしめ給え。この先の1年間に我が社に病魔を来らしめず、子孫を守護して死せしむことのないように。我らが首狩に行けば支那人の首級を獲らせ給え。

この祭辞は、朗唱である。頭目が部族民の行列の先頭に立ち、声高らかに行われるからだ。そしてこの祭辞は祈りであるということもできる。祖霊に過ぎた1年を感謝し、新しい1年の豊穰、無病息災、無事安穩を祈念している。

森丑之助が著した『臺灣蕃族志第一卷』は1918年の発行である。それからちょうど90星霜を経て、筆者は2008年8月10日に苗栗県泰安郡象鼻村永安部落で行われた祖霊祭に参加することができた。以下に前日9日からの祖霊祭の流れを時系列で記す。

2008年8月9日

18:30 苗栗県泰安郷象鼻村永安部落到着

頭目・・・高春輝 Dali Wasaw

1928年3月1日生 80歳

日本名：山中竹男

副頭目・・・楊忠義 Mayngus Yukih

1952年7月25日生

日本統治終了後の生まれなので、日本名はない。

各家々では、それぞれ竹を切り出し、笹を取り除いた枝に、団子を突き刺したり、お酒を入れるための竹で出来たコップをぶら下げたりしたものを作っていた。祖霊祭に持っていく供物の1つである。

夕食後～24:00

頭目の家の庭先で、頭目や副頭目、数人の部落民とともに車座になって火を囲み、糯米酒を飲みながら伝説の話やいろいろな歌を聞いた。

その横では、多くの部落民がグループ毎に次々に糯米酒を作っていく。

頭目の家の中では、若者たちがテレビを見ていた。

8月10日 祖霊祭当日

4:00 起床

4:30 出発

墓地へ通じる道の手前に広場があり、そこに部落民が集まってきた。全部で60件ほどの世帯。ともかく日の出前に祈りを捧げなければならないので、皆が揃ったところで、すぐ墓地へ向けて歩き出す。家族によっては、泰雅族の伝統的な装束を纏って参加している。この行列の先頭に頭目と副頭目が立ち、祭辞を述べながら進む。「猪を刺す、熊を刺す」という掛声も聞かれた。

5分も歩けば、山あいの墓地に着く。斜面と少しの盆地状になった平地を利用した、自然な地形の墓地だ。奥へ続く道の入り口のところに、長細い供台がしつらえてあり、そこにそれぞれの家族単位に、供え物を置いていく。品物は、作物、糯米酒、お菓子、ジュースなど様々であるが、1年の境界より以前の物は捧げてはならない。祖霊祭は1年の分かれ目の意味合いを持つからだ。これらの供え物は、この墓地の *utux* に捧げたので、

家に持ち帰ることはできない。

お供えが終わると、それぞれ自分の家の墓のところへ行く。土葬を示す人身大の直方体の台の前に、名前が彫ってある石が墓だ。まずこの台の上に散った落葉などをきれいに掃いてから、そのまわりに家族が立ち、一族の年長者が挨拶する。花を供え、ローソクを灯すと墓参りは終わる。

頭目と副頭目は、糯米酒を入れた手作りの竹のコップを1つ持って、糯米酒を大地に撒きながら祈りを捧げる。この儀式が終わると、道の途中に炊かれた焚き火の上を跨いでから帰る。男性は振るまわれる糯米酒を一杯飲んでから、跨いでいた。火を跨いだ後、餅を一切れずつもらう。この餅は、墓参りの間、墓地の入り口手前の木の枝などに括りつけてあった。何故なら、一旦この餅を墓地に持ち込むと、墓地の *utux* のためにそのまま置いてこなくてはならなくなるからだそうである。

6:00 帰宅

一旦、全員家に帰る。それぞれの家で、お正月のような御馳走を頂く。私が泊めて頂いた、比令さんの家では、お父さんが取ってきた、猪、猿なども供された。お父さんは、通常一飛鼠（松鼠）、山猪、山羌（狐狸）、山羊、熊、猴子（猿）、兔子（兎）、陷阱（打獵）一などを狩っている。今は猟銃ではなく、全部罠でしかけるそうだ。高粱酒もお祝いに出して下さった。50度の強いお酒だ。

9:00 共食・共飲

三々五々、部落民たちが頭目の家の庭先に集まってきた。この日のために設置されたスピーカーを通して、部落内に泰雅の歌が大音量で流れている。ここで、皆が一緒に共食、共飲をする。皆で作った糯米酒を飲み、一頭の豚をさばいて茹でたのを分ける。始めに頭目と副頭目が餅つきを行い、後は皆で続けて餅をつく。それから、歌ったり踊ったり楽しい宴会となった。私のような部外者も快く迎えてくれた。

90年前に行われていた祖霊祭が実際はどのようなものであったかは、今の私たちに知る術はな

い。しかし、口碑伝承の文化によって、少なくとも当時と同じ祭辞を聞き、同じ歌を聞くことができた。生活や人々、祭りの外観に変化はあったかもしれないが、人々の祖霊に対する感謝の思いや、健康や安全を願う祈りは変わることはないのである。

4.移動の歴史

文字を持たない民族にとって、口碑伝承で伝えるその民族の歴史は、とりもなおさず、その民族が確かに生きた証である。自分は何処から来たのか、自分は何者であるのかというルーツやアイデンティティの証左でもある。現在のような戸籍がない時代、移動・分派を語る口頭文化は明らかにその民族の歴史そのものであった。

勿論ある部族の足跡が全て歴史であるとする、泰雅族には移動単位の部族毎の歴史があることになる。これは各々の部族にとっては重要なことであるが、研究の対象としては捉えにくい。そこで、泰雅族の移動を3つの系統に分けて見ていくことにする。この手法は移川子之蔵の先行研究でも用いられている。移川は移動の系統を、発祥伝説の差異から3つに分類している。即ち、発祥地を巨石の残るピンスブカンにおき、その岩の割れ目から祖先が生まれたとするもの、直接大霸尖山から降り立ったとするもの、白石山にある老木の枝間から男女が生まれたとするものである。これらの3系統は、「人」をそれぞれセコレク、ツオーレ、セデクと称していることから分類できるとした。これらの発祥地はいずれも中央山脈に沿っており、始祖の人々が尾根をつたい、眼下に良好な土地を見出しては移動を続けた、昔日の姿が彷彿とするようである。付記すべきこととして、移川が1935年に著した『臺灣高砂族系統所属の研究』に書かれた上記の分類の中で、70余年を経た現在、セデクと称していたグループは泰雅族とは分かれ別民族として承認されたことを挙げておく。

筆者は後年彼らが、さらに北方、西方、東方へと進んでいった経路を鑑み、北部の桃園県、西部の苗栗県、東部の宜蘭県の3県をフォーカスし、それぞれのグループの口頭文化を概観することに

した。2007年、2008年に北部と西部のリサーチを終え、2009年に残る東部を調査する予定である。

そもそも筆者が系統の比較を考えようとしたのは、たまたま2回の調査の結果、結婚式のプロトコールと、村人たちが気軽に口ずさむよく知られたメロディーとが、エリアによって異なることを見出したからである。特に後者に関しては、北部において、CDにもなっているような泰雅族にとってはポピュラーなものであったにも拘わらず、西部で聞いたところ、それは我々の音楽ではないと言われた次第である。これによって、口頭文化については「泰雅族は……である。」といった包括的な取り上げ方には無理があることがわかる。

5.泰雅族の口頭文化の変容について

筆者は2項において、泰雅族の口頭文化を5種類に分類した。ここではそれぞれの変容について考察するが、まず共通の問題に触れておく。

2007年8月の鳥来での調査のおり、朗唱を聞かせて下さった方は、78歳であった。2008年8月の調査における最高齢者は90歳を超えていた。何処の村でも古い歌を歌える人は数人ぐらいしか残っていないようだ。古い歌を知る人々の高齢化の問題がある。またそれに伴って泰雅語の古語の消失が進んでいる。

大戦後の国民党の政策により、学校教育において標準中国語の強制指導が行われた結果、原住民語(母語)を使える人口が大幅に減少した。現在、日常に使われる言葉は中国語である。

泰雅語の文字化の問題がある。様々な記録や、若い世代に泰雅語を教える際、あるいは母語による文学運動など、多くの局面で泰雅語のアルファベット表記化が進んでいる。これは必要なことではあろうが、老人たちは、音は正確にはローマ字に当てはめることはできないという。文字に表すと、感情を正確に表現したり把握したりできないようだ。目で見たことを口頭で話すことはできるが、見たこと感じたことをそのまま書くことはできない。例えば、「ある晴れた日に……」と声にするときは、どんな青空で、どんな気持ちであったかを声で表現することができるが、文字で書けば

イメージの広がりに限られてしまうからだ。川田順造の「ことばによる伝えあいのうちでも、声で話すことばが、文字に書かれたことばとくらべて表情が豊かで精彩にあふれている」¹¹との指摘の通りである。

また、次世代への母語の継承のあり方も問題となっている。2001年以降、小・中学校で郷土言語教育が選択必修科目となり¹²、母語を学べる可能性が出てきた。しかし、それは外国語を学ぶのと同様で、スピーチコンテストの導入など、自然さを欠いたものとなっていることも否めない。

言語は多くの要因によって様々に変容する。R. M. W. ディクソンは「きちんとした記述がなされていない言語は 2000-3000 言語あるが、これらの言語は次の二、三代代のうちに使われなくなってしまうだろう。」¹³と警鐘を鳴らす。厳然とこの地球上に何百年何千年と存在し、受け継がれてきた言葉を失わせてはならないと考える。それは単なる表象の消失ではなく、その言葉を使ってきた人々の根源的なものの終焉となるからである。

5.1 古訓を取り巻く現状

多くの古訓が文字化され、様々に商品化され後世に伝えられようとしている。筆者が初めて出会った泰雅族の古訓の朗唱もCDで売られているものだった。ただそこにあった音は、後のフィールドワークで出会った、語りかけるような自然なものではなく、劇的に歌い上げたものであった。

かつて、Lmuhw（部落の大人たちが寄りあって歌会をすること）の場などで、人の口から口へと伝えられた古訓は、今やメディアを通じて知られるようになった。泰雅族に有名な刺青の文様の1つに、女性の両頬にVの字形に彫るものがあった。これは、耳から入った知恵が口から出て、次の人に伝えるという意味があるそうだ。口頭文化ということの最大の意味は、言葉を伝えるときに心も伝えるということではないだろうか。パプアニューギニア南高地州の大パプア平原の熱帯雨林に暮らす原住民のボサビ人が、歌をCDにする時こう聞いたそうだ。「たくさんの人たちが私の歌を

聞くことになるというけど、私はその人達を知らないし、私の声の中にある世界についてその人たちに何がわかるのか。」と。¹⁴

古訓とは、そもそも泰雅族の中だけに伝わる最も重要な精神的規範であった。これを、外部の何の関係もない我々が、聞くことができるのだ。遠く離れた日本に居ながらにして、泰雅族から自然との共生や、豊かな知恵、勇気や誠実を学べるということだ。ただ、今そこで歌っている人の心が伝わることは難しい。

5.2 史歌の終焉

日本統治時代、泰雅族の人々は牛を使った耕作や水田の作り方などを教わり、定住化が進められた。戦後は耕したその土地を売り、平地へ移住する人が増加した。本来、移動の歴史が泰雅族の歴史であったので、現在移動の歴史が詩として綴られることはない。

5.3 即興歌存続の可能性

即興歌は一定のメロディーのフレーズを使って、そこに自由に言葉を当てはめて歌うものであるが、その言葉には当前泰雅語を使ってきた。泰雅語を使える人口が著しく減少している現在、この様式が存続しうる可能性は極めて低いと言わざるを得ない。

5.4 相聞歌存続の可能性

祖霊祭の前夜、頭目の家の庭先で火を囲みながら我々が歌や語りを聞いていた時、若い世代の人々は家の中でテレビを見ていた。アメリカの番組であった。今や思いを伝えるために歌を歌ったり、口琴を奏でるということはなくなっているのではないだろうか。青年層にあっては携帯電話の圧倒的な普及がこういった典雅な伝統を崩しているようにも思われる。相聞歌存続の可能性も低いといえるであろう。

5.5 讃美歌の選択

宣教師達の熱心な布教とともに、部落民への医療的な行為、服などの物資の提供、配給物資の分

配所としての教会の利用などといった理由から、大量の部落民が入信していった。泰雅族にはもともと *utux* という名の霊的な存在への信仰があった。これは宇宙万物の創造主でもあり、この絶対的な宗教概念の素地がキリスト教の唯一神的な発想を受け入れ易いものにしていたとも考えられる。

5-6 千年ぐらい前から、原住民の祖先は続々と台湾に移り住み、ある者は山に入り、またある者は海辺に留まって営々と生活を営んでいた。ところが、16 世紀、ポルトガル人によって台湾が発見され、「麗しの島」と呼ばれて以来、オランダ、スペインによる占拠、続いて中国・清朝の支配、1895 年からは日本の統治、そして 1945 年再び中国の支配と、目まぐるしい変化に晒されてきた。原住民たちは、流転する民族の歴史の中で、日治時代の皇民思想でもなく、中国国民党の中華思想でもない、過去の宿習に囚われない第 3 の価値観であるキリスト教思想を選んだのだ。

古訓は讃美歌となり、讃美歌は古訓となった。

6.最後に

筆者が祖霊祭の前夜泊めて頂いた家の御主人は、敬虔なキリスト教信者で、当初祖霊祭には参加しないと断っていたが、再三誘って結局、宴会に来て楽しそうにされていた。信仰は自由だが、長く親しんだ伝統や部落の仲間達との交流も、肌

馴染むものではないだろうか。泰雅族は、マイノリティーの人々が、如何に複合的な価値観の狭間で、文化の変容を受容していくかというモデルでもある。

台湾の持つ多様性は、言語だけをとっても公用語である中国語（大陸の普通語に当る）以外に、閩南語、客家語、原住民諸語と様々に表れる。言語の背景にある価値観の多元性は口頭文化に様々な影響を与えることであろう。

かつて文字を持たず、口承のみで歴史や文化を伝えてきた原住民。彼らは、気の遠くなるような長い時間の繰り返しの中で、固有の文化を守り続けてきた。今、様々な外部要因から彼らの口頭文化はあるいは変容を余儀なくされ、あるいは消滅の危機に瀕している。

環境破壊や局地戦争など近代文明による様々な問題が深刻化している現在、近代文明そのものが問い直されている。文明世界が切り捨ててきた人間の本源的なものへの探求、自然との調和に基づいた叡智を、筆者はこの泰雅族の口頭文化に見出した。今こそ我々は泰雅族の、祖先、生命、自然、宇宙へ向かう謙虚な姿を学ぶべきであろう。変容・消滅の危機に面した彼らの口頭文化を、同様の危機にある少数民族のモデルとし研究していくことが、より一層平和な未来への礎となることと確信するものである。

¹ 清水 純『講座 台湾文学』国書刊行会 2003 年 p.86

² 泰雅族の歌謡の分類については、許常惠『民族音楽論述稿』（楽韻出版社 1992 年）、田哲益『台湾原住民歌謡與舞蹈』（武陵出版有限公司 2004 年）、陳鄭港「泰雅族音楽文化之流變」（國立政治大學民族研究所碩士論文 1995 年）などの分類があるが、筆者は口頭で何を伝えたいのか、ということに注目して 5 つの分類を考えた。

³ CD「原浪潮」雲力思歌唱、魔岩唱片股份有限公司 2000 年、雲力思は泰雅族出身の歌手、音楽 CD として作製されたものである。現地の採集例として、余錦福「泰雅族 Qwas Lmuhuw（朗誦式歌謡）即興吟誦下的歌詞與音樂思惟」中華民國民族學 2007 年、鄭光博「Sm'inu puqing kinhulan na Tayal（懷念、遙想泰雅故鄉的根源）」國立政治大學民族

研究所碩士論文 2006 年、高理忠「民族音楽 教育對泰雅文化復振影響之研究—以復興鄉為例」國立政治大學民族研究所碩士論文 2007 年など、調査地・歌唱者を異にした例がある。それぞれに固有名詞など歌詞に異同があるが、子孫への教訓、生活の規範など、基本的な内容に大きな違いはない。

⁴ 移川子之蔵『臺灣高砂族系統所屬の研究』臺北帝國大學土俗・人類學研究室調査 1935 年 p.22

⁵ 周錦福編『原住民部落歌謡 泰雅族・賽夏族』苗栗文化局 2005 年 p.29

⁶ 余錦福編『台灣原住民民謡一百首』台灣原住民原縁文化藝術團 1998 年 p.19

⁷ 森丑之助『臺灣蕃族志第一卷』臨時臺灣舊慣調查會 1918 年 p.279（この本の中では「オットフ」と表記されている。*utux* は現代ローマ字表記による）

⁸ 小島由道『蕃族慣習調査報告書（第 1 卷）泰雅族』

中央研究院民族學研究所 1996（1915）年 pp.33-62
古野清人『台灣原住民的祭儀生活』原民文化出版
2000（1915）年 p.156-161
鈴木實『臺灣原住民風俗誌』臺原事業股份有限公司 1993 年 p.123

⁹ 吳仁惠「烏來地區泰雅族祖靈祭儀式流變之探討」
台北師範學院 2004 年 p.1

¹⁰ 森丑之助『臺灣蕃族志第一卷』pp.245-246

¹¹ 川田順造『聲』筑摩書房 1998 年 p.19

¹² 林初梅「多言語社会台湾の言語教育」平成 17-18
年度科学研究費補助金基盤研究 C 研究成果報告書
2007 年 p.169

¹³ R. M. W. ディクソン『言語の滅亡』大角翠
訳、岩波書店 2001 年 p.190

¹⁴ 山田陽一編『自然の音・文化の音』昭和堂 2000
年 p.55

(Received: December 31, 2008)

(Issued in internet Edition: February 8, 2009)